



星一つ

見方 歩

真夜中に目が覚めた。気が昂っている訳でもなく、精神はとても落ち着いているのだが、目を瞑っても一向に眠れない。暗闇の中で目を開き、見上げた天井に目を動かしてみても、光の無い世界では距離の掴み所が無く、すぐ目の前に何かがあるかと、遙か彼方まで宇宙のように広がってしようと、空間としての大きさを計り知る事が出来ない。

目が闇に慣れてると、幽かな明るさを感じた。それが窓である事は位置関係から承知してはいるが、今時分の外に何があるのかは思考を巡らしても思い当たらない。どうにも気になって、体を起こし障子戸を開けた。窓の外には星が輝いているのが見えた。秋も深まり、晴れた夜空は放射冷却現象で冷えている事だろう。窓越しに見える星が、あまりに明るく奇麗なので、窓を開け、遮るものの無い夜空を見上げると、あり得ない程の満天の星空が広がっていた。星の連なりから星座の名前を呼び起こし、心の中で唱えて行く。あまりにも奇麗なものだから、横で寝ている妻を起こし、窓から夜空へと誘う。顔を並べて見上げる夜空には、より鮮明に輝く星座があり、その輪郭もはっきりと分る程に星が連なって見えた。どの星座も名前通りの姿形を浮かび上がらせていて、まるで星座盤を眺めているようだった。こんな風に星を眺められるのは初めてのはずなのに、どの星座も星も当然のように知っているように思われ、不思議と心は落ち着いていた。

際限なく宇宙と繋がる天空に、地上から眺めた上下の観念など無意味だろうが、星座は縦十列、横十列に整然と並び、上下方向も秩序正しく揃えられていた。眺めているうちに夜空が流れ始めた。向かって右の端から順に、大きな弧を描いて回転し始めた。夢でも見ているのかと脳裏に浮かんだが、思いは記憶に留まらず消えて行った。

玄関の方から犬の吠えるのが聞こえてきた。この夜更けに、とそれ以上は思わず玄関まで暗闇を歩き、灯りを点けた。足下にぬいぐるみのような子犬が一匹、舌を出して見上げていた。何故、玄関の中に子犬が。とは思うものの、不思議に感じる事は無く、ドアを開けた。ドアの外は長い廊下が続いていて、子犬は廊下に出ると何処かへ行ってしまった。三軒向こうのドアが少し開いていた。漏れる明かりに宴の声が聞こえてくる。そうか、ここは旅館宿の一室か。改めて記憶が頭を揺さぶると、何も無かったようにドアを閉めた。玄関に灯した明かりのせいで、部屋の中が薄明かりに包まれている。仄かな明かりと言えど、室内の灯りは夜空を隠してしまう。

闇に備え、部屋の位置関係を頭に入れてから照明を消したが、部屋が明るい。窓を見ると燃え盛る太陽が、大きな火柱を上げているのが見えた。幾重にも重ねた色付き遮蔽ガラス越しに眺めたように、姿は影のようにくっきりと映し出されていた。コロナの形が移り行く影となり、灼熱の渦が流れ、黒ずんでいる黒点を取り囲んでいる。部屋の窓一面に吹き上げる火柱に脈動を感じた。

窓の下を見ると、何かの装置が稼働していた。その先を見ると、投影された星座がぐるぐる回っている。旅館が作った大きなプラネタリウムだと即座に納得した。見ると夜空は雲に覆われていて、生暖かい風が吹いていた。窓の外からは、宴の声が幾つか混ざり聞こえていた。夢を見ている事には気付いてはいたが、雲の切れ間に星を一つ見つけた。〈了〉